

ひかりありとみし夕がほのうは露はたそかれ時のそらめ成けり、とほのかにいふ、  
〔夫木和歌抄露十三〕正治二年百首  
正三位季經卿

みやぎ野の小萩を分て行水や木の下露のながれなるらん

〔萬葉集四相聞〕笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首略○中  
吾屋戸之暮陰草乃白露之消蟹本名所念鴨

〔夫木和歌抄枯野十六〕老若五十首歌合

前大納言忠良卿

うらがる、野への草ばの霜とけてあさ日にかへる秋の白露

〔凌雲集〕合製五首 九月九日侍讎神泉苑各賦一物得秋露應製

蒨收警節秋云老百卉初腓露已凄池際凝荷殘葉折岸頭洗菊早花低未央闕側承雙掌長信宮中起

隻啼謬忝恩筵何所賦晞陽湛々被群黎

〔萬葉集八秋雜歌〕三原王歌一首

秋露者移爾有家里水鳥乃青羽乃山能色付見者

〔宜禁本草乾玉石金土水〕秋露水 甘平無毒在百草頭者愈百疾止消渴栢葉上露明目

露霜

〔萬葉集抄十〕露霜と云事先達の料簡まち／＼也或は露をつゆしもと云霜は露のなる物なれば露をつゆしもといふといへりこれは因中説果の義にあたり或は霜をつゆしもと云露凝成霜故也これは従本立名の心也或は九月ばかりの寒露をいふ露の霜に成ほどなれば露霜と云

霜にもなりはてすなを露にて又露にもあらぬほど也是は中間の位にあたり三の義の中は此義甚深也又今の歌のごとくならば只露と霜とにかなへりといへる義也

〔圓珠庵雜記〕露霜といふにふたつありひとつには露と霜となり常のごとしふたつには萬葉第七同第十に詠露といふ題に露霜とよみその外露霜さむみなどあまたよめるは秋の末に至り